源氏物語忍草本文校訂劄記

中西健治

一　本文校訂の必要性

天保五年（一八三四）の序文がある版本「源氏物語忍草」は今日も多く現存し、古書肆にもよく見受けられる。書物の仕立ては区々ではあるが、本文は同一で異なる版はない。ただ、中には書店の刊行書目録を第五冊目の巻末に六丁分付しているのがある。「金花堂蔵板目録」「日本橋南通四丁目　須原屋佐助」とあるのがそれで、劈頭に「源氏忍草（げんじしのぶくさ）　五冊　成島公序」を掲げ、「此書は源氏物語一部の大意（たいい）を初学の心得やすからんために耳ちかきことばにてさとしたるなり源氏を学び給ふ人は必（かなら）ずまづよみ味（あぢは）ひ給ふべき書なり」という宣伝文が付されている。その文言の宣伝文であるとの性格を勘案してもなお、浩瀚な源氏物語に接近する有力な手がかりになりうるのではと思える縁は「耳ちかきことば」にあろう。これがために本書は源氏物語入門書としての期待に応え、かつ要領の良い梗概本としても夙に高い評価を獲得してきたのである。しかしながら本書を正面から研究対象として扱った論文は意外と少ない。源氏物語忍草の本文の普及程度にもよるのだろうが、近年、西沢正二氏の『早わかり源氏物語忍草』の書名で、源氏物語の内容が簡潔に把握できるように本文校訂を加え物語内容との関わりを頭注として付した源氏物語忍草（以下、忍草と略称）が刊行された。本書は、本来の書名に「早わかり」という語を冠する命名法からして、忍草の本文提供よりも、おそらくは「耳ちかきことば」故の、源氏物語を解読する際の手引き書として活用されるべく出版されたのではないかと思われ、忍草という作品普及のためには歓迎すべきことなのではあるが、忍草自体の研究の側面からみれば、本書の本文校訂などの点でいささかの不備もあるように思われる。[1] 稿者はここ数年、入手しやすい忍草写本の紙焼き本や版本などをもとにして源氏物語の輪郭把握を目指した授業をするためにこれらを用い、それを基礎に考察を重ねつつある。その導入の過程としての本文整理の段階で、天保五年序文の版本を用いている従来の活字本本文には若干の修正が必要ではないかと思い始め、また、版本本文へのいくつかの疑問を抱くようになった。加えて、版本をもとにしている『早わかり』にも修正を加えねばならないとも思うようになった。本稿はそのいくつかについての心覚えをまとめたものである。源氏物語忍草略校本の作成過程の中間報告とそれに伴う考察ゆえに劄記と題した所以である。

二　版本と写本

『国書総目録』や『古典籍総合目録』によると、版本は天保五年序文のもののみが各所に保存されており、写本は十数カ所にあることがわかる。いま私に便宜的に版本を底本として簡易の略校本を作成するための手控えを創っている。これによると、版本本文にはたとえば次のような

脱文箇所があり、版本を基にして読むことは、やはり一定の吟味を経た後が望ましいだろうと考えるようになった。示せば次のとおりである。版本本文の中に括弧で写本（いま、小野高校蔵本を引く）本文を記した。

○巻一・二九ウ・3　紫の上と新枕し給ひて［そのつきのよはいのこもちにてもちゐを奉るをみ給ひて］源惟光を召て　（葵巻）

○巻二・三八ウ・6　源うるさく思してまづかくし給へり源［なてしこのとこなつかしきいろをみはもとのかきねは人やとはめん御かへし玉かつら］山賤の垣ねに生し撫子のもとのねざしを誰かたづねん　（常夏巻）

○巻三・一九ウ・9　御使などせし中納言といふ［おほろ月よの女はうたちのあにゝいつみのせんしといふ］ものあり　（若菜上巻）

○巻四・四五オ・6　御心まうけせし人〳〵口をしうおぼす［あね君はましてあたなる御こゝろゆへとくちをしうおほす］男といふものは思はぬ人を思ふがほに　（総角巻）

四例中三例は目移りによるおそらくは一行文の脱落であり、常夏巻は一首の脱落である。[2]

いま版本をもとに、手元に参照できる諸本によってその本文を検討したい。対象としたのは国会図書館蔵本（国会本と略称。以下、同じ）、天理図書館蔵本（天理本）、春曙文庫蔵本（春曙本）、龍谷大学図書館蔵本（龍谷本）、金沢大学図書館蔵本（金沢本）、小野高校蔵本（小野本）、架蔵満光本（満光本）で、他に中　哲裕氏によって翻刻されている鶴岡市立図書館蔵本[3]や、余田　充氏翻刻の大洲市立図書館蔵（矢野玄道文庫）本（大洲本）[4]、版本を書写したことが歴然としている東京大学図書館蔵本（東大本）、九州大学図書館蔵本（九大本）の紙焼きも併せて用いた。まだ多くの未見の本があるが、これらの諸本の中で、形式的に特に注目されるのは、五冊本の天理本である。この本の第一冊目は「源氏物語系図」「巻之次第」など湖月抄と同じ内容を収め、二冊目以降は各巻の本文の前に岷江入楚と同様な年立を掲出している点である。もちろんこれは湖月抄の「年立」ともほぼ重なることにも興味があるが、源氏物語忍草の方が項目数が少なく、むしろ岷江入楚に近い。このことの意味についても考える必要があろう。また、写本の多くは四冊仕立てになっているものの、天理本は五冊本仕立てになっていること、架蔵の満光本は一冊本仕立てになっていて、文字がきわめて小さく書写されていること、書写をした甘千叟芳室の跋文内容に大きな異同のあること（これは嘗て一部、言及したことがある）[5]等、言及すべき問題は幾つも見出せるものの、本稿では紙幅の関係もあり、桐壺・須磨・明石の三巻にのみ絞って本文異同に関する部分的な考察を記しておきたい。

写本、版本の検討の前に、活字本についても若干の異同が見られるので、まずはその点について述べておく。

三　活字本の異同

現在、我々が目にすることの出来る活字本は、明治三十九年に冨山房から刊行された『袖珍名著文庫』（いまこれをAとする。以下同じ）、大正十五年に国民図書株式会社から刊行された『校註日本文学大系（第六巻）』（B）、同年の刊行で先の『袖珍名著文庫』を発展させた『新型名著文庫』（C）、それに『雑誌古典研究・別冊附録』（昭和十五年十月発行）（D）、及び、近年の『早わかり』（E）の、計五本がある。A、Cは関根正直氏[6]、Bは沼波　守氏の校訂によるもので、子細に見れば、それぞれに誤植も含めて若干の本文異同もある。たとえば、桐壺巻の「輦車」の説明の箇

所、「手にて引く」とあるのを、Cのみ「手にてひき」としたり、須磨巻、源氏が京の女性に手紙を送り、その返事を見るところ、「御返しども見給ふにも」とある本文を、Cのみ「見給ふにも」を欠いている。同様な箇所は、桐壺巻に六箇所、須磨巻に七箇所、明石巻に三箇所あるものの、各巻全体からみればきわめて微少なものであり、これによってCの本文を忍草の本文として排除する根拠にはならない。この傾向は他の巻についても同様である。ただ、注目すべきは、桐壺巻から宿木巻までを収めているDの本文は、発行時の時局の制約を受けたとおぼしき伏せ字[7]の箇所が六箇所（紅葉賀・葵〈二箇所〉・蓬生・若菜下〈二箇所〉）見受けられることである。いづれも源氏と藤壺との密通に関する記述に関わる箇所で、とりわけ若菜下巻の「我父帝の御目をぬすみ、藤壺をおかし、冷泉院出きさせ給ふ」の一文（一七0頁）の伏せ字は二行に亘っている。しかしながら、桐壺・須磨・明石の三巻の異同箇所に限定してみれば、A、B、Dは、すべて版本本文と共通の本文であるので、これらが版本をもとにしていると確認はできるのである。以上のことを考え合わせれば、近年の『早わかり』が、底本として版本を用いることを選んだのも、一応は賢明な選択であったかと思われる。

四　版本の序文・跋文について

版本には著者、北村湖春の跋文以外に、成島司直の序文、坂　昌成の跋文が付されている。ただ、成島司直、坂　昌成の文章を共に序文とする見解もあり[8]、現に版本のなかには、成島司直の序文の次に一丁の坂　昌成の文を続けて二つの序文がある体にして、その次に目録を掲げている版本もあるが、一応、坂　昌成の文を跋文としておく。作者である北村湖春の手に成る跋文や書写者の識語については、写本間で本文についていささかの異同があるが[9]、これについては今は触れない。ここでは、版本として刊行時に付されている序・跋の文言についてのみ述べる。

「図書頭と称し、幕府の御書物奉行を勤め、和漢の学に通じ著述も多い人[10]」と言われる成島司直の序文には、本書出版にあたって序文を請われ、この類の要請をすべて断っていたものの、内容が内容だけに拒否しがたく思い、「いま忍草といへるは、詞の花をかざらず事の跡をもあなぐり求めず、たゞ巻々の大意を耳近き言葉もて見む人の心にさとしやすからむをのみむねとしぬれば、物語よむ輩のまづ此文より分入らむに、山口の道しるべ、このうへやあんべき[11]」と概ね歓迎する言辞を寄せたのであった。源氏物語の読解は湖月抄の出現によって拡大したが、これは諸説を知るには便利であるが、そのために迷いを生じやすい。しかしこの忍草は平易に書かれている。だから江湖に推薦するのだという趣旨の言を、かなり凝った文章で熱をこめて書いている。これに対して、坂　昌成の跋文は「むらさきの根ざししるべき大むねをつみとりて、若草のうひ学びのために、たよりせる文[12]」であると、成島司直と同趣旨ながら、写本間の異同を補訂して本文を校訂したのだという、研究的な視点からの一文を加えているところが根本的な相違点である。源氏物語梗概書としての忍草を共に高く評価しながらも、前者は源語研究史も含めて総括的にみて忍草の刊行を賀する序文を付し、後者は冷静な目で本文を吟味したことを付言しているのである。忍草は天保五年の序文をもって一度だけ刊行された本ではあるが、それ以前の写本の段階で一定の評価は得ていたと言えるだろう。現に多くの写本があり、今後も発見される可能性のあることがそのことを裏書きしていよう[13]。ここで注目すべきは、坂　昌成の跋文において、右に引いた文のあとに、「うつしつたへの中には、忍ぶのみだれやと、うたがはしきくだり多かるを、巻々に考へあはせ、ところ〴〵に補ひくはへて」と、本文校訂に関わる記述を具体的に示し

ていることである。この箇所を素直に読むならば、坂　昌成は忍草の「うつしつたへ」ている諸写本を参照して、「うたがはしきくだり」について本文校訂を施していたということになろう。刊行前に諸写本を「考へあはせ」たというからには、あるいは現存の写本のどこかに「忍ぶのみだれ」の痕跡があるのではないかと思いたくなるのである。

五　版本本文と写本の対立本文

いまこのような観点から、まずは桐壺・須磨・明石の三巻に限って、先に掲げた数本の写本を版本と対照させて、試みに異同表を作成してみた。異同の詳細は紙幅の関係もあってここに掲載することはできないし、またさほど意味のある表とも思えない。ただ、多くの写本の本文が一致して版本本文と対立している箇所には、坂　昌成をして「忍ぶのみだれや」との疑念から修正された結果なのではないかと思われ、あるいはまた、坂　昌成が見たいくつかの写本の異同がこの言を引き出させたのかも知れないと判断することは許されよう。そこでまず前者の件について、桐壺、須磨、明石の三巻のみを対象としてみると次の表のようになる。

版本本文と写本との異同（桐壺・須磨・明石）

（丁数・表裏・行数ヲ上段ニ、版本本文ヲ掲ゲ、下ニ異同ヲ示ス。傍線ハ該当箇所ノミノ異同ヲ示ス）

【桐壺巻】

①一オ・4　と巻に書しは―か
②一オ・10　御宮づかへ―宮つかへ
③一ウ・8　と書しは―とかきしか
④二オ・7　夜半（よは）―よなか（夜半（よなか））
⑤三ウ・4　似たるものもや―ものもかな（春＝人もかな）
⑥三ウ・7　入内―御入内
⑦三八ウ・7　いふごとくに―いふやうに
⑧四〇ウ・9　帚木の巻―はゝ木ゝ（はゝきゝ）
⑨四一ウ・10　唐土―もろこし
⑩四一ウ・10　ためし多し―（ナシ）
⑪四二オ・9　持て参る―もちてまいる
⑫四三オ・1　源―源は

【須磨巻】

①三六ウ・5　左大臣殿―左大臣
②三八オ・1　と御かへし―御かへし
③三八オ・6　御陵（みささぎ）―御はか
④三八オ・8　御心にて―御心こそ
⑤三八オ・9　恨たり―うらめしかり
⑥三八ウ・6　御陵（みささぎ）―御はか
③四三ウ・8　墨摺（すみすり）―すみをすり
④四四ウ・2　つくり―つくりて（造りて）
⑤四四ウ・5　しどけなう―しとけなふ
⑥四四ウ・8　おはしけると―おはしましけると
⑦四五オ・6　恥（はづか）しうて―はつかしくて（恥しくて）
⑧四五オ・8　御かへし―御かへしを（御返しを）
⑨四五ウ・5　過（すこ）して―すこしてこそ
⑩四六オ・7　心もとなし―いと心もとなし
⑪四六オ・7　源―源氏

【明石巻】

①四三ウ・5　雷鳴（かみな）り―いかつちなり（雷（いかづち）なり）
②四三ウ・6　楼（たかどの）に―ろう（らふ・廊）に

これらを一見するかぎり、表現の上での微妙な齟齬は感得されるものの、「うたがはしきくだり」の「忍ぶのみだれ」に該当するような本文異同が並んでいるとは思えない。写本で「よなか」、「御はか」、「いかづち」、「ろう」とあるのを、版本でそれぞれ「夜半（よは）」、「御陵（みささぎ）」、「雷鳴り」、「楼（たかどの）」と改変しているのが語法的に注目される程度である。坂　昌成が本文校訂を行ったと言っている以上は、このような改変をも含みながら、なおも須磨巻⑩の事例のように、本文の続き具合からしては不十分な表現であると判断して「ためし多し」という本文を「考えあはせ」、「補ひくはへ」るような校訂作業があったと見るべきであろう。つまり、参酌した写本本文に物語の内容に照らして不適当な表現があり、これを校訂したのであろうとみるのである。そのように考えるならば、その校勘の痕跡を他の写本から推測することの手掛かりが得られないだろうか。そこで次に、本稿の眼目である課題に触れ、まとめとしたい。

六　版本本文と写本の異同

目下、現存のいくつかの写本本文を版本と対照させながら読み進めている。その過程において、手元にあるごくわずかの本のなかでも、いく

つかに分類することが可能であることが分かった（現在の時点では五類型）。しかしこれはまだまだ多くの未調査の本もあり、不十分であるため大まかなところしか見ることは出来ず、系統というようなものでもない。ただ、その諸本のなかで、版本本文との異同が比較的顕著なものとして天理本、金沢本、大洲本の三本と春曙本と満光本の二本とがほぼ揃って同じ異同傾向を示している箇所が注目される。いま桐壺巻のみに限定し、なおかつ右に掲げた五本の異同のみを列挙すると次のようになる。

一オ・2　いづれの御時にか—御時か（天・金）
一オ・6　すぐれ—すくれて（天・金・大）
一オ・7　ひきいで—ひき出し（天）—引出し（金・春）—引出（満・大）
一オ・8　なくなりたりとも—なくなりとも（天・金）—なくなりとも（大）なくなるとも（春・満）
一ウ・1　なゝめならず—なゝめならすときめかしたまひけれは（天）
一ウ・1　弘徽殿の女御—弘徽殿（春・満）
一ウ・3　くね／＼しき—くれ／＼しき（天・金・大）
一ウ・5　餘情—ゐせい（天・金）—威勢（春）—威勢（満）
一ウ・5　弘徽殿をは—弘徽殿を（天・金）—こうきてんを（大）
一ウ・6　憚らせ—はゝかり（春・満）
一ウ・7　いとゝ—いと（天・金・大）
一ウ・8　たまの—玉のやうなる（春・満）
一ウ・9　成給ふ夏—なりたまふころの夏（天・金）
一ウ・9　病気—病ひ（春）—病ひ（満）
二オ・5　のる也—のるくるまなり（天・金）—のる車也（大）
二オ・7　行きかふに—行かふほとに（天・大）—ゆきかふほとに（金）
二オ・8　聞召す—きこしめすに（天・金・大）
二オ・9　涙にかくれ—なみたにくれ（天・春・金）—泪にくれ（大）
二ウ・4　御使に—ナシ（天・金・大）
二ウ・7　かたみ心—かたみの心（春・満）
二ウ・7　母君命婦に—みやうふに母君（金）
二ウ・9　いとゝ—ナシ（春・満）
二ウ・9　御涙—御なみたに（満）
二ウ・10　はれかたき—にかきくれ給ふ（春・満）
三オ・2　はゝ君にもらひし—はゝ君より玉はりし（春）—はゝ君より給はりし（満）
三オ・3　なき人（場貴妃）貴妃の魂（春）—貴妃の魂（満）
三オ・4　覚させ—おほへさせ（天・金）—おほえさせ（大）
三オ・6　帰り給ふ—帰らせ玉ふ（春）・帰らせ給ふ（満）
三オ・7　美しく—うつくしう（天・金・大・春・満）
三オ・8　何事にも—何事も（天・大）—何ことも（金）
三オ・9　恵く—さとう（天・金・大）
三オ・9　風かし—ひゝかせ（天・金）
三ウ・3　号しけり—なつけしなり（天）・名つけしなり（金）—なつけし也（大）—名付し也（春）—名付し也（満）
三ウ・5　似させ給ふと—よく似させたまふなり（天・金）よく似させたまふ也（大）—よく似させ給ふと（春）—よく似させ給ふと（満）
三ウ・8　女御—けいほ（天・金・大）—継母（春）—継母（満）
三ウ・9　稚きより—けんしをさなくより（天）—おさなくより（金・大）—御おさなきより（春・満）
三ウ・9　源氏御心に—御心に（春・満）
三ウ・9　御元服あり—ありて（春・満）
三ウ・10　給はり—玉はりて（春）・給へりて（満＝「へ」ミセケチ）
四オ・3　其姫君—その姫（春）・その姫（満）
四オ・4　御許へ—御もとに（春・満）
四オ・5　従弟なり—いとことしなり（天・金・大）—いとことし也（春・満）
四オ・6　家をは—家を（天・金・大・春・満）
四オ・8　十四五—十四五才（春・満）

これらの本文異同を見る限りにおいては、坂　昌成がいうように、写本の本文の粗悪ゆえに版本本文のように改められて良くなっているとは必ずしも思えず、むしろ写本の方が適正と思しい箇所がまま見受けられるように思われるのである。たとえば、「余情」は「威勢」とある方が適切であり、「のる也」は「のる車（くるま）なり」、「涙にかくれ」は「なみたにくれ」、「号しけり」は「なつけしなり」、「従弟なり」は「いとことしなり」の表現の方が、それぞれ適切な語の用い方ではあろう。なお、同様な方法で須磨・明石両巻についても天理本・金沢本・大洲本、春曙本・満光本の、それぞれ異文をもつ箇所をいくつか取り出してみると次のようになる。

○須磨巻

①（三六ウ・10）侍りけるなど—侍りけるかな（天・金・春）侍りける哉（大）—侍りけるなと（満）
②（三七オ・1）驚くべきにも侍らず—にあらす（天・金・大）
③（三七オ・6）故葵の上の召つかひし女房達也—ナシ（天・金・大）
④（三七ウ・3）うきものは世なりけり—うき世也けり（天・大）—うき世なりけり（金）
⑤（三七ウ・8）衰へ—おとろき（天・金・大）
⑥（三七ウ・9）見おこせ—ふみをこせ（天・大）—ふみおこせ（金）
⑦（三八オ・7）御陵—はか（天・金・大）—御墓（春）—御墓（満）
⑧（三八オ・8）給ふとて・・・・おはしまして—ナシ（天・金・大）
⑨（三八オ・9）恨たり給へば—うらめしかりたまへは（天・金）—うらめしかり玉へは（大）—恨めしかり玉へ（春）—恨めじかり給へ（満）
⑩（三九オ・1）夜深く—ナシ（天・金・大）
⑪（四〇オ・8）忍びあへずおぼす—しのひあへす（天・大）—しのひあえす（金）

⑫（四〇ウ・4）雁のつらねて―つらなりて（天・金・大）―連りて（春）―連りて（満）
⑬（四〇ウ・9）伊予の介か子息―むこ（天・金・大）
⑭（四一オ・3）しのびて―ナシ（天・金・大）
⑮（四一オ・4）つくりかはし―つくりつかはし（天・金）―つくり遣はし（大）
⑯（四一ウ・5）人の此―人の子の（天・金・大）
⑰（四一ウ・6）かつうは―かつは（天・金・大）
⑱（四二オ・6）御とふらひに―ナシ（春・満）
⑲（四三オ・3）龍宮―龍神（天・金・春）―竜神（大）―龍神（満）

○明石巻

①（四三ウ・3）問給ふ―おもひたまふ（天・金）―おもふたまふ（大）
②（四三ウ・5）雷鳴り―いかつち（天・金・大）―雷（春）―雷（満）
③（四三ウ・6）楼―ろう（天）―らう（金・大）―廊（春）―廊（満）
④（四四オ・4）いかゞおぼさむと・・・告に任せ―ナシ（天・金・大）
⑤（四四オ・6）告給ひしに―のたまひしに（天・金・大）
⑥（四四ウ・3）琴琵琶取りよせ―ひわとりよせ（天・金）―琵琶とりよせ（大）
⑦（四五オ・4）入道も―ナシ（天・金・大）
⑧（四五オ・8）御かへし書し也―御かえしを奉る（天・金）―御かへしをたてまつる（大）
⑨（四六オ・1）岡部へ―岡部のいえへ（春）―岡部の家へ（満）
⑩（四六オ・7）心もとなし―いと心おとなし（天・金・大）―いと心もとなし（春・満）
⑪（四六オ・9）七月廿日―七月七日（天・金・大）
⑫（四六オ・10）別れん事―わかれ奉らんこと（天）―別れ奉らんこと（金）―別れたてまつ覧事（大）
⑬（四六ウ・1）入道は聞より・・・かなしめり―ナシ（春・満）
⑭（四七オ・3）入らせ給へは―わたらせたまへは（天・金・大）

これらの諸例を見る限りにおいては、必ずしも写本本文が粗悪とも言いかねる箇所もあり、坂　昌成が写本本文を「考へあはせ」たり、「補ひくはへ」るような改訂を施された版本がすべて適正な本文として定着しているのかとは言いかねるものもある。いま右にあげた例のうちのいくつかが物語そのものと齟齬しているからこその改訂もありえたのであると思われる。例をあげよう。

まず須磨巻⑧、明石巻④、⑬のような本文の大きな脱落は内容理解に支障をきたす箇所であり、これを欠いている写本は適当な本文とは言い難い。須磨巻③の例は「中納言の君」についての説明であるため、これを欠く写本は大きな欠点と言えよう。同じく⑤の「おとろき」は原文「こよなうこそおとろへにけれ」（二・一三頁）[14]に、⑥の「ふみおこせ」とあるのは原文「涙一目浮けて見をこせ給へる」（同）と齟齬している。須磨巻⑬のように系図上の誤りもある。明石巻⑥「琴琵琶取りよせ」は原文では「岡部には琵琶、笙の琴取りにやりて」とあり、版本の方が適正であり、明石巻⑪の「七月七日」は原文「七月廿よ日の程に、又かさねて、京へ帰り給べき宣旨くだる」（二・八一頁）とある「廿」を箇所を「七」と見誤って写したと思しい。これらのことから坂　昌成は天理本・金沢本・大洲本、あるいは春曙本・満光本のようなごく初歩的な誤りを犯しているような本文を抱えている写本を参照していたのではないかということが十分推測されるのである。それが例えば「しのぶのみだれ」であったり、「うたがはしきくだり」であったのではなかろうか。しかしながら、それでは一体いかなる本であるのかについては、これ以上はまったく想定できないのが本稿の限界と認めざるを得ない。今後の調査にまちたい。

注

① 四箇所の脱文の他にも、誤植、脱字などがあり、再版での訂正が必要であろう。たとえば十二頁「引つ越し」は「引こし」に、十三頁「おもしうし」は「おもしろし」に、十六頁「歌尽きし」は「歌書きし」に、十八頁「詠みつ」は「詠みて」になどである。

② 葵巻の例は『早わかり』では三十二頁、常夏巻は八十二頁、若菜上巻は百五頁、総角巻は百六十二頁に、各々相当する。うち、『早わかり』頭注に脱落箇所である旨を断っているのは常夏巻のみ、「底本に欠くが脱落とみて、諸本によって補った」とある。他の箇所にも何らかの注がぜひとも必要であろう。

③ 中　哲裕氏「鶴岡市立図書館蔵『しのふ草』（上）・（中）・（下）」（「鶴

岡工業高等専門学校研究紀要」第十号・十一号・十二号）

④　余田　充氏「大洲市立図書館（矢野玄道文庫）『源氏しのぶ草』（一）～（四）」（「言語文化」・第一号～四号）

⑤　拙著『平安末期物語攷』二八八・二八九頁参照。「甘千叟芳室」の識語は写本間で大きな違いがあり、これも考察に値するものである。

⑥　AとCは共に関根正直の簡潔な解題がある。同じ著者の解題とはいいながら、文語体のAの方が、口語体で書かれたCよりも重厚な感があるばかりでなく、説明内容の深浅、記述事項の配列の相違もあって、Aの刊行された時とCのそれとの二十年の間に作品に対する扱いの変化があったようにも思われる。

⑦　戦時下における源氏物語の扱いについては、たとえば秋山　虔氏監修『批評集成源氏物語・第五巻・戦時下篇』や有働　裕氏『「源氏物語」と戦争　戦時下の教育と古典文学』に詳しい。

⑧　斎木泰孝氏「北村湖春『源氏物語忍草』の写本と刊本」（「安田女子大学大学院文学研究科紀要」第5集）

⑨　注⑤に同じ。

⑩　関根正直氏校訂『新型名著文庫　源氏物語忍草』解題（三頁）による。

⑪　注⑩に同じ。序・二～三頁。

⑫　注⑩に同じ。跋文・二四五頁。

⑬　近年の報告によれば、たとえば斎木泰孝氏が稲賀敬二氏蔵『游陽雑俎辛集』と題簽のある一冊本を紹介され（注⑧参照）たり、また、原　豊二氏が鳥取県東伯郡琴浦町にある稽古有文館蔵の四冊本を紹介されている（『源氏物語と王朝文化誌史』一九四～一九八頁）。地方にはまだ写本の形で伝わる本があろう。

⑭　新日本古典文学大系による。巻数と頁数を記す。以下同じ。

（付記）

注③・④の論考をお与え下さった中、余田両氏の御厚意に深謝いたします。

源氏物語忍草は成島司直の序文に天保五年六月とあることを唯一の根拠として、一般的にその年に刊行されたかとみられているが、本学図書館所蔵および川越市立図書館蔵の版本は天保八年十月の刊記がある五冊本であることを脱稿後に知り得た。この本は後刷本の形跡があるように見えるが、この問題については別稿に譲る。

（本学文学部教授）